

はじめに

九州の歴史には、常に中国・朝鮮との対外交流が見え隠れしている。それは、列島の他地域と大きく異なる特徴であり、九州のアイデンティティーを形成する要素の一つと言えるだろう。

九州は日本の西の玄関口であり、中国・朝鮮・東南アジアに対しての発着地として、中世を通じて機能した。その延長として、大航海時代には、アジア進出を果たしたヨーロッパ世界との交流窓口にもなった。その位置付けは近世にも引き継がれた。江戸時代の対外交流の「四つの口」(対朝鮮―対馬、对中国・オランダ―長崎、対琉球・中国―薩摩、対蝦夷―松前)のうち、三つは九州にある。

アジア諸国と九州とを結ぶルートは、大きくは三経路あった。朝鮮半島からは対馬海峡を横断し対馬・壱岐を経て北部九州にいたるルート、中国大陸からは揚子江河口部か

ら東シナ海を横断し五島列島にいたり西北九州につながるルート、中国大陸南部・東南アジアからは、沖縄諸島・奄美諸島を北上し南九州にいたるルートの三路である。

原始・古代以来の歴史を持つ朝鮮半島との交流は、対馬・壱岐二島を経由して展開した。両島の地勢的位置は、新羅の外寇・刀伊の入寇・元寇において激戦地となったことが示すように、平和的交渉と武力侵略を共に受けやすいという特質を持った、列島全体を見渡しても、稀有な地域である。

揚子江河口部と九州とを一直線に結ぶ大洋路は、对中国貿易の大動脈として機能した。東シナ海を数日間かけて横断した船舶は、まず五島列島に着岸・停泊した後、九州本島、最終的には博多を目指した。

中国大陸南部から琉球・奄美を経て南九州にいたるいわ

ゆる南島路は、大洋路のサブルートとして登場したが、中世後半期においては、琉球の中継貿易と相まって、貿易のメインルートのひとつとしての役割を担った。奄美諸島には、重要輸出品としての硫黄を産する硫黄島、中世陶器であるカムイヤキを生産した徳之島など、重要な島々が点在する。

薩摩から九州西岸を北上すると、天草の島々を縫い、有明海にいたる。有明海の入りに近い菊池川河口には高瀬津があり、鎌倉時代後半以降、貿易港として栄えた。

九州が地勢的に背負った対外世界との交渉窓口という性格は、東アジアを舞台に活躍した倭寇の本拠地になるといふ、いわば負の側面ももたらした。倭寇は東アジア海域世界における、国家の枠組を超越したネットワークの産物であり、国家の存亡にかかわるほどの政治的課題となった。

一時的とはいえ九州に日本国王が誕生したのは、明にあっては倭寇対策の一環であり、国内的に見れば九州が対外関係を根底として歴史的に育んだ独自性の象徴であると言えよう。

『九州の中世Ⅰ』では、「島嶼と海の世界」と題して、九州の独自性と言える東アジア海域世界とのつながりをおつかう。それは、列島において九州が歴史的に担った役割、位置付けを踏まえた時、まず第一に取り上げなくてはならない視点であると考えたからに他ならない。

本書に掲載した各論文は、それぞれの執筆者の問題意識に基づいて執筆していただいた。それは、方向性を限定すること、各地域の研究状況や課題が読み取れなくなることを恐れたためである。

編集者の意図は前述したそれぞれのルートと、それらが接続する九州本島側の地域に関わる論考を対にして配列することで示すにとどめておく。しかし、そうすることで、各地域で発掘調査が進んでいる諸遺跡を、海洋世界と日本列島との歴史的景観の中に位置付けることができるものと考えている。

大庭 康時